産業界の発展

メソポタミアの時代から交易の商人宿として産声をあげた宿泊産業は、今日では観光産業の重要な担い手として認識されている。もっともホテル産業は、観光業のみならず、流通、飲食を始め、様々な産業界にもかかわっている。大阪、ホテルプラザの開設者である鈴木剛は次のように述べる。

「わが国は、太陽にも水にも恵まれているうえに、四面海に囲まれ、山あり、川あり、島あり、で、自然の風光が非常に美しい。スイスにも劣らない環境の中にある。世界中のレジャー用のホテルとしては、そういう意味から、非常によい条件を備えているといえる。（中略）国策としての観光行政が打ち出されることによって、いかがわしいホテルの整理もできる。あたらしい観光地の開発もできる。誇り得る日本の自然環境も、由緒ある名所旧跡も維持保存できる。」

（鈴木剛、pp.120-121）

観光と平和

近畿日本鉄道を発展させ、都ホテルチェーンを創業した佐伯勇は、昭和 38 年に次のような論文を発表した。

「観光産業は『見る』ため、探求するために『行く』という基本的な要素を持っている。また、それは”楽しみ”を求めに行くのだから、結局『行って、見て、遊んで、食べて、休む』という五つの要素から成り立っているといえる。そしてこれらに関するサービスを提供するのが観光産業である。観光施設は、自然美と人工美を調和させて、より美しいものを創造するものでなければならぬ。地球上に一つしかないその土地の特徴を適切にとらえて、そこに世間が求めているものを造らないと成功しない。客層を的確にとらえていない失敗も多い。俗化した温泉地に、清遊に適したハイクラスのホテルを造っても、宿泊客は戸惑うだろう。”客層をとらえて”施設をこれにあうように工夫することも、”土地の特徴をつかむ”ことも、観光産業の常識なのだが、これに反した実例が案外多い。観光は平和とともに栄えるものである。平和な時代が続く限り、観光産業の将来は明るい。それを成長産業にするかどうかは、経営者の手腕にかかっている。」

（※軒上泊、pp.169-171、抜粋引用、一部修正）